

檄！

赤報

(創刊号)

〈総括集〉

総括Ⅰ (突撃兵)

総括Ⅱ (通信兵)

総括Ⅲ (狙撃兵)

第一部 綜括 II 自らの位置と任務と任務を対象として 第二章 經過と綜括 建軍過程の敗北と危機と、獲得した内容

第一章 經過と綜括

※一項 建設過程「夏の終り」と丸九回大会

4、28年以前に初まつた我同盟内論争は、大衆的立場の中での4、28年争の敗北と、それ以後に於ける線持論争の中で、あの大衆的立場と、自らの決意の維持と、故に、戦国同盟志の多くを赤軍派へと生計出で、彼らの党内論争での敗北と、自らの党内論争の不徹底さを「分派」として結果させた。我々は、彼ら赤軍派との党内論争——党内斗争の過程に於て、丸九回大会を組織して軍争を組織する境と、この成果を明らかにした。

「夏の終り」に我々はXX、XXを前に「XXを組織する党」の内容を「XX」の建設として題し、それを第一期生の組織化として結果させた。心なご、一方に於て我々は「XXは何な」といつた内容の不明確さ、不充足さを同時に内容としたもので、「XX」一搬、「世界XX」XX「一搬」に依拠し、着手せざるを得なかりし——という限界をもつていた。

従つて我々は、BUND結成以来の「X」の課題を、現実の闘争の中に実現していつ、大衆的立場の意志をもつた組織と共々、その飛躍の限界をもつていたのである。二つした、我々の内容に於ける不明確さとして内容とした限界はその「X」の確さを不明確なものとした。
(Ⅱ) 十月と建設——開始した「性格」をめぐる論争
我々は「一搬」な「X争」と「XX」をめぐる「政治内容」——ある部

9、28年建設に向けて、建設過程「夏の終り」に於てその出生からXX一搬を組織して組織の線持を「X論文」として完成させた。

第二章 X論文の獲得した内容とその限界——現在の評価

(Ⅰ) X論文の線持に於て明らかにしたこととは何であつたか
我々は「夏の終り」に於ける討議に於て、X論文の中に「展開した内容」は「一搬」+「XX」の「共衆」的内容に対する「XX」論文をつて対立の中心をなす。その提起した内容が「XX」は何な」といつた内容の不充足さに於て、同様の限界を内に持つていた。

(Ⅱ) X論文の意図に於て何であつたか
X論文はその中に於て軍建設の目的、任務、性格について先ず明らかにした。その意図は「夏の終り」に初まつた我々のX建設の「X争」の不明確さを止揚し、その「X」は何な」に於ける我々の「X争」を明らかにしたのである。彼はこの論文の中で「XXを止揚したXX」といつた内容は政治的XXといつたXの一搬の性格過程に於けるXの任務を明らかにした。次に「軍建設の目的」といつた戦争の消滅と階級の消滅を明らかにしたこととをこの「Xの任務」として明らかにしようとして

分には方針——に於てオルター、又、志願したのではあつたか、さうした「X争」に於ける内容の不明確さ、軍建設の目的を不明確に、10—11月争への「共衆」の内容へ二面化していつた根拠があり、以後のXの性格をめぐる様々な主張として結果したのである。
「夏の終り」に結成された我々は、丸九回大会に於て明らかにされた「XXを組織する党」といつた立場に依拠し、我々の意図の内部に於て「大きな十月」「革命的飛躍」「勝利な、敗北は消滅な」をかけた総力戦としてあつた十月を前にして、その決意であつた。4、28以後赤軍派が分派として一定の後退を余計なく、此に我同盟の力を、自らの手を回復すること「決意」であつた。「XX」建設は「二つした同盟の」「決意集団」として提起し、その組織の任務と目的は「XX」XX「二つした同盟の」実体であつた。さうして、このXX「X争」を経て、その終りと敗北に於て、「共衆」に對する「正XX論」をどうして性格論争を行なつた。

(Ⅲ) XX月—XX月 その綜括で我々の獲得した内容
我々はXX、XXの敗北の中で、新には内容を獲得すべく論争を開始した。その内容は「XX」は何な」であり、X—Xの関係を含んで「世界XX」の内容をめぐる論争としてあつた。さうしてXX、XXの線持に於て「共衆」に對する我々の論争は、「共衆」を語りとして線持し、「XX」X「二つした」以後の方向を確立した。心なご、一方に於ける我々は「XX」XX「二つした」の出生に於て、XX—XX月の終りと同時に、我々の目的を失つた。故に「飛躍」と「情性」を必然化させた。二つした中で我々は、再度

と明らかにしようとした内容は、「軍の性格」を明らかにしたこととであつた。さうして、何よりも中心の課題としてあつたのは、「夏の終り」以後、軌道に我々につきまといつて来た「X内自然発生性」を止揚するため「軍の思想」を明らかにしようとしたこととである。

(Ⅳ) 評価——我々の姿勢
我々は、二つしたX論文の「二つした」の線持討議の「主体的意図の止揚」つて、その「内容」に於て意味を理解し、評価とその限界を止揚する「二つした」明らかにしようとしたこととである。

X論文はその主体的意図(党のXに對する考え方を明らかにする、といつたこと)は別に、その意図と具体的成果(行動綱領の設定、Xの目的、任務、性格を不充足ではあつたが明らかにして、Xの行動と内容に其筆を身支た)に訓練と教育としての討議、従来の我々の古い活動の型に於ける訓練、教育としての升考をいつたこと、そして、訓練と教育がX内全生活を支障するところかつ、訓練とは何な、教育とは何なについて充分に扱ひえらかつたこと、「一搬」なX論文の限界であり、二の限界故に、X論文を意図を充分に普遍化し、組織し、自然発生性の止揚の武器として登場させたことと、出来ず、従つて、枠のせいとしたこと。我々は、二のX論文の成果を充分に活用し、意図そのXの思想、①建Xの目的、②Xの任務、③Xの性格として明らかにし、これをどうして、自然発生性と対決し扱ふこと、同時にX論文の限界を具体的に思想斗争の場に於て止揚し扱ふ。

(Ⅴ) X論文について新らしい提起は、次でいつて行なつたり。さうして、今度のXX建設の実際の提起として、組織の型、人の質、活動の内容、型、性格として明らかにしようとする必要があるのであり、部分的提起は避けたい。(

XXを根拠としてあり、党の指導の弱さの表現でもある。

(四) 投降主義II日和見主義

×月永以後、我々は様々な傾向を互の内に用やせれた。完全非合法I非公然の中にあって我々も主要は対決軸は日和見主義であった。小ナル私闘を公然と暴露せられた部分は、戦いと階級II武装解除の両を勘繰り、全この軍にII戦いに於ても、非公然活動に於ても、生活(共同生活)について不徹底を極めた。この頃の根柢は、党が自然発牛性に対決軸とする内戦を指導の中に獲得していなかったことIIにある。

沖五章 三月末本格開始した非公然について——線括——

(一) 非公然と非合法についての理解の不十分な原因は、この頃についてこのスルビヨマ技術主義を生み出し、階級斗争の技術としての観念を欠落させたこと。我々はこれについての考え方、単に、外力の強制要因に對應するものとしてのサエタク、フロヒタリア階級の敵に對する武器として使用し行動するものとして取ればならず、我々はこのことが遂行し得るであった。

(二) 我々の党の軍に對する考へ方、目的、任務、性格、形態を明確に設定出来なかつたことIIに因する結果の暴露をあいまいにして、内閣にルーベニシシ、小ナル投降家の存在を諷して、さうした部分の動揺を止揚出来なかつた。

沖六章 自らの位置に關する自己批判

(一) 私は自らの責任に於て、この線括を提出し、今日までの過程を止揚し、新たにXXの出発的に立つて、自らの立場を思想斗争の組織化として行はう。

(一) 党指導と自然発牛性——止揚について——

×月末非公然突入は同時に我々の要求をつくり出した問題は大々く自然発牛性への対応であった。特×月建設戦より、自然発牛性を組織化したことによつて、それは必然でもあった。単に×月永の非公然の中にあつて、その全面的な要求を得たにすぎない。党は、この頃には、指導を要求されたことIIである。連軍の思想、連軍の目的、XXの任務、性格などの指導の軸として、思想斗争をその内容として指導するようになっていくべきであった。

——線括——

公つた。また——
(三) 水平主義と個人主義に對し、思想斗争を組織し得なかつた原因は、XX内不團結を生み出したことによる。

(四) さうした三男と共に、それらが政治目標の不確立で、何よりも軍事行動の谷間に於て、自らの小ナル性を止揚し切るまで軍の組織的結合と、思想斗争の指導の欠いた事にある。

——任務線括——

(一) 軍内には、この様な小ナル的傾向に對し、私は、私の立場と任務にあつて、それの根柢的止揚を及ぼして、軍内思想斗争を組織し得るべき先ず自己批判する。

(一) さうした、自己の不充分性を指摘しつつも、彼らに對し、組織上の指導について、スタンス的態度をとりつた事を自己批判する。

沖七章 XXの性格をめぐるいくつかの主張について——

(一) 公共論

これは、軍事に於ける戦術の一形態であり、その限りに於て正しい。我々はこれを、「大衆の戦いに對する正規軍の戦いの」位置や任務としてこのは誤りである。共產主義突進隊は、全々の最も重要な一小部分であり、全軍内の一側面、戦いの形態とする。我々はこれを、軍事技術の一つとして、戰術的勝利のための「高度な戦術的戦術隊形」としてこれを認めなければならない。

(二) 將校団論

「將校」そのものはXXの隊形を持つ場合、必要であり、別にそれを組織する事は誤りであらう。しかも、今日XXに変わっているそれは、XXの性格として変われている限りに於て、誤りである。これはXXがXXのXXを遂行するに於て、果すべき役割の一つであつて、何れの組織に對してではあるか。「組織する」ための「行はう」であり、「全人員を同業一は組織し、訓練する」部隊としてある。

(三) カルタ団論

これは、×月XX派の戦争斗争以後の地区出動の線括として本格化した意見である。この意見は、XXの性格と線括についていわれた、という「誤り」を生み出した。我々はそれを、XXの重要な、本質的な任務として、この派のXXの線括から、XX政治工作の回廊として

整理し、その提議の本質的線括をXXの組織無用形態との関連に於て明らかにした。

(四) いわゆるXX

これは前三項に對するマンチーナでして、出されたものであつた。このため、我々がこのXXには何か、XXは非XX非馬場大土に對して、XXは階級のXXの意識であり、階級戦にXXに對して、訓練された、武装した(準備は出来た)の(一)である。

故に、XXは、前三項を組織し、その運動の内部に、具体的形態として、この内包しているものである。

第八章「X」共同生活について

(I) 我々が共同生活を提起したのは4つの理由に基いていた。第一に、我々が恒常的「X」組織であることにより、恒常的戦時隊形——恒常的「X」体制を維持し、平時に於ける生活——X活動生活を維持し続けなければならないこと。その実から要求される指揮——指揮体制と隊編成上の問題。第二は、恒常的「自衛的」非合法——非公然という性格による、分散非公然——集中非公然の二つの側面をどう解決するか。第三に、共産主義理論の學習——組織形成を成し得るために、意識の普遍化と相互批判——自己批判——討議体制の目的、組織的現象形態として。第四に、「X」内共産主義運動の實現——共産主義的組織の強化を維持するX活動としての目的形態としてであった。

(II) ところで「X」の正々には今日に於ても普遍的な階級として「X」の本質的因縁として確信する。しかも、今日の我々の階級の内容は、この共同生活の破壊として、現れているにも及ばぬのである。従つて次に「X」の提起された共同生活」と、破壊した「我々の共同生活」の二つを対比し、我々の破壊の解明と、その内容について明らかにしたい。

(III) 第一点について、我々が提起し、一定の形式上の説きを措くつて實現して来た、いわゆる「3、3方式」に於ける隊形造の問題として総括し得る。班——分小隊として行なつて来た、「X」の我々の隊形は、概々、比較的小規模に於て、又、分散して行なう意志統一の場合に、分隊長の存在が大きな位置を占め、我々の当初的意図は成果を上げる事となつて来た。比較的大規模な戦時隊形には、その存在意義は見つけられなかつた。何故なら、我々が集合した時、班は班長が、その班を小隊長に

直接結合せざるを得ず、従つて、その中で分隊長は重擔を担つて介在出来ず、そのことより分隊長は「恒常的分散指揮者」としての位置と任務を遂行し得ず、又、同時に、下からの水平主義に屈服したからである。第二点自身は我々の間の線格及二つの面を指し示す。一つは、兵力の独自調査による暴襲。二つには、内部からの裏切りである。我々の共同生活破壊の契機は「X」にありつたといえよう。しかも、「X」に於て我々の本質的契機は他にあり、この実から内容ではないといつて可い。我々は、兵力の暴襲、及び、裏切りに対しては大きな痛手を蒙つた。非公然の何であるか明らかになり、技術訓練と、解決し得られぬ。前者については、その可能性を全的に否定するのは危険である。我々が組織としてあり、恒常的「非公然」活動を行つており、「X」が非公然である以上、その「X」の存在は必然的であるとせざるを得ない。この全的否却は、我々の組織的契機を生かすし、「X」内自衛的共産主義を有利にする方である。

従つて我々は、この限界の止揚を、組織的意識の強化を第一として、自らの階級意識の練成をどうして解決し得ぬ。

【第三点】については不十分以下であつた。技術の普遍化がそのあり、意識の普遍化は、手放したところを中止せざるを得なかつた。原因として我々が「X」内共産主義の實現の方向と方法について、訓練と學習を本質的契機以上の「X」を知つたといふ力量を失つた。指導経験の不足に於て、訓練と學習を、党派主義——党内主義——階級主義として組織し得ず、「指導の強制」以上のことにならなかつた。次に「X」内自衛的「X」

共産主義的組織化を出来なかつた。指揮の強制と、それに對する即目的反撥が、「X」内不團結の不統一を生かした。

(IV) 先づ「X」の二つの線格と「X」の二つを導き出した結論は何であるのか。我々が共同生活を提起した過去のものとして「X」は、非合法ながらも、非公然ながらも「X」の発展を行つたが、非合法ながらも、提起し得られなかつた。我々が、昨「X」月創造して来り、今は「X」の階級化が、規律が、そして目的の指導で、主体性に向つて行つて居る。

我々は、今日まで進んで来た共同生活の「目的」と「意識」を本質的に組織し、その上に立つて、その実践——實現形態を「X」内自衛的共産主義に組織するの第一の契機として、次の二つに整理し、提起する。

- ① 指導——訓練の階級を第一として行なう。
- ② 我々の「X」についての認識、目的、任務、性格を明らかにし、學習する。
- ③ 共同生活についての考え方、目的、意識を明らかにし、學習する。
- ④ 分隊長制度と政治委員制度を再検討し「X」内各隊の整理（中間隊の廃止）、権限、我能、関係の明確化と徹底化。
- ⑤ 指導中核の形成と指揮——指導の一本化。
- ⑥ 以上を踏まへ、「X」の隊形を、思想斗争の陣形として、同時に共同生活の本質化する。

- ⑦ 「X」内自衛的運動を、実践論として行なう組織規律の自己規律としての提起し、その階級を第一として「X」内規律として獲得する。
- ⑧ 第一「X」の統一目的組織規律の獲得を、「X」の、恒常的戦時体制——陣形として創出する。
- ⑨ 共同生活の今日的課題——「X」の全的化、単一化と共同生活の指導の

全的統一線の完成。

(V) 獲得したものは何ぞ。

我々は昨年に初まった「X」建設過程を、何よりも「X」月以後の敗北で困難な党内状況の中で、我々の組織的立場を固つたのである。我々の「X」過程に於ける「X」は何ぞ、「X」は何ぞ、「X」の目的、任務、性格の不明明「X」マイマイを暴露した。同時に、我々の、手放りの「X」建設過程に於ける「X」の勝利と敗北の中より、様々な「X」マイマイに於ける傾向の徹底的な暴露と、その建設の、又、教育と訓練の中心軸に於ける「X」の暴露と「X」

このことと昨年から今日の、我々の獲得した最も大きなものである。我々の「X」の、その存在の根底的意味に於て、「X」を第一として「X」の目的、任務、性格に於ける階級的獲得である。そこで、経験を経て、「X」内規律として「X」の陣形に於ける「X」の「X」の、その階級の破壊を身に感ずるが、その本質に於て、正当性を認めるところから出来獲得した成果の中に於けることと出来る。こうして、その階級の「X」の獲得と、我々の獲得した階級として「X」の「X」の獲得と、その階級の獲得である。

（この全てが、今日に於ける我々の、昨年から今日の獲得した階級である。）

→ 第一章 完 → 実験第一 →

のXX建設に向けて、意識統一を遂げ、XX月より於てこの出生からXX月XX日までの間に、この建設を完成させた。

第二章 XX論文獲得したものの その限界ー現在の評価

XX論文一掃括して於て明らかにしようとしたものは何であつたか
我々は、このXX月に於ける討議に於て、XX論文の中に展開された内容は、
「のXX月XX日」の「共衆」的内容に對する「XX」論文として對
置したものとかわらぬ。その提議した内容が「XX」とは何か、「XX」について
現存の把握の不充分に於て、同様の限界を内に持つていた。

(II) XX論文の意図は、今日に於てその根本的意図を持つてある。
我々のXXとXX組織の基本組織を、党のXX的成員の前段に於て、先行
的に明らかにした意図は、今日に於てその根本的意図を持つてある。
「(II) XX論文の意図は、今日に於てその根本的意図を持つてある。
我々のXXとXX組織の基本組織を、党のXX的成員の前段に於て、先行
的に明らかにした意図は、今日に於てその根本的意図を持つてある。」
「(II) XX論文の意図は、今日に於てその根本的意図を持つてある。
我々のXXとXX組織の基本組織を、党のXX的成員の前段に於て、先行
的に明らかにした意図は、今日に於てその根本的意図を持つてある。」

ものいわぬ一兵卒としての過去に、 怒りの鉄槌を下さうとする。

一兵卒として、我々のXXを率ゐて、我々のXXを率ゐる。隊員期往
のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。

我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。

て明らかにしようとした内容は、「軍の性格」を明らかにしたものであつた。
我々は、この「内容」に於て意味を理解し、評価をその限界を止揚するこ
ろから明らかにしようとする。

(III) 評価ー我々の意図
我々は、この「内容」に於て意味を理解し、評価をその限界を止揚するこ
ろから明らかにしようとする。

(III) 評価ー我々の意図
我々は、この「内容」に於て意味を理解し、評価をその限界を止揚するこ
ろから明らかにしようとする。

真剣に向つて、怒りの鉄槌を下さうとする。

真剣に向つて、怒りの鉄槌を下さうとする。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。

我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。
我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。我々のXXを率ゐる。

60377
177 240 200